明治学院大学学長
　松原康雄殿

博士学位論文（課程博士）審査報告書

2020 年 2 月 12 日
審査委員長　金沢吉展

下記の博士学位審査請求に関し、専門審査委員会において論文審査および口述試験を行った結果、全員一致で合格と判定致しましたので、ここにご報告致します。

請求者氏名　湯浅　紋
論 文 名　　日本の心理臨床家に向けた多文化間カウンセリングコンピテンス教育の検討――日本における多文化間カウンセリング研究の考察、心理臨床家の多文化間カウンセリングコンピテンスを測定する指標の作成、教育プログラムの開発とその効果測定を通じて――

専門審査委員会
　委員長　金沢吉展　　（心理学部教授）㊞
　委 員　渋谷　恵　　（心理学部教授）㊞
　委 員　杉山恵理子　（心理学部教授）㊞

学外専門審査委員
　委 員　阿部　裕　　（四谷ゆいクリニック院長）㊞

Ⅰ 審査内容

湯浅　紋氏の博士学位申請論文「日本の心理臨床家に向けた多文化間カウンセリングコンピテンス教育の検討――日本における多文化間カウンセリング研究の考察、心理臨床家の多文化間カウンセリングコンピテンスを測定する指標の作成、教育プログラムの開発とその効果測定を通じて――」はＡ４判 139 頁、図表 20 点、資料 15 点から構成される論文である。論文は、標準的な心理学的学術論文の形式に則っており、課程博士学位論文としての体裁が整えられていると判定する。大学院心理学研究科では、本学学位規程ならびに心理学研究科内規に基づき、博士論文専門審査委員会を設置し、博士学位論文の審査を行った。

1. 論文の趣旨

本論文の目的は、日本の心理臨床領域における多文化間カウンセリングコンピテンス(MCC)研究を展望し、その現状と課題を明らかにするとともに、MCC 教育プログラムの開発とその効果を検証することである。

2. 論文の構成

本論文の構成は以下の通りである。

第 I 部　心理臨床領域における多文化研究の展望と現状の課題
第 1 章　日本の心理臨床領域における多文化コンピテンス教育の現状と課題
第 1 節　コンピテンス研究と多文化コンピテンス
第 2 節　多文化間カウンセリングコンピテンス
第 3 節　日本の心理臨床領域における多文化間カウンセリングコンピテンス
第 4 節　心理臨床家に多文化間カウンセリングコンピテンス教育が必要な理由
第 2 章　多文化研究にまつわる用語の定義と理論
第 1 節　多文化研究にまつわる用語の定義
第 2 節　多文化間カウンセリングの理論
第 II 部　多文化間カウンセリングコンピテンスを測定する日本語版指標の作成
第 3 章　日本語版 Multicultural Counseling Inventory 作成の試み
第 1 節　多文化間カウンセリングコンピテンスを測定する指標
第 2 節　調査 1“日本語版 MCI の因子分析とその信頼性”
第 3 節　日本語版 MCI 知識尺度
第 4 節　調査 2“日本語版 MCI における再検査信頼性の検証”
第 5 節　調査 3“日本語版 MCI における再検査信頼性の再検証”
第 4 章　第Ⅱ部考察
第 III 部　心理臨床家の多文化間カウンセリングコンピテンス教育プログラムの開発とその効果検証
第 5 章　心理臨床家の MCC 教育プログラムの開発と効果検証
第 1 節　既存 MCC 教育プログラムのレビュー
第 2 節　MCC 教育プログラムの開発
第 3 節　MCC 教育プログラム開発の考察
第 4 節　MCC 教育プログラムの効果検証
第 6 章　総合考察
引用文献
図表
資料

3. 論文の概要

第Ⅰ部では、本邦の心理臨床領域での MCC 教育についてレビューを行い、MCC 教育の重要性の根拠を述べている。北米や欧州においては心理臨床家の職能として MCC が強調され、測定指標や教育プログラムの開発や導入が進められてきたが、本邦において MCC 研究は未だ乏しい現状が示された。次に、多文化研究の歴史として、より広義での多文化の概念を理解する重要性が強調されてきたが、本邦の多文化研究は、外国人支援に携わる心理臨床家を対象とした領域に留まっている現状が明らかになった。しかし、日本文化独自の多様性、さらに多様化する日本社会の現状から、多文化を広義で捉え、MCC を獲得することは、本邦の心理臨床家の職能の向上の一助になると考察した。

心理臨床家の MCC の欠如や不足が、カウンセリングプロセスやクライエントに与えるネガティブな影響、および MCC の獲得や向上が、カウンセリングやその結果及び効果に与えるポジティブな影響を実証的研究に基づき考察し、本研究がなぜ心理臨床家が MCC を獲得することが重要と考えるかの根拠として示した。さらに、既存のプログラムを骨子とし、本邦の心理臨床領域に必要な配慮を加えた独自のプログラムの開発と、その効果の測定が必要であることを考察した。加えて、多文化研究に関わる用語の定義や理論モデル、構造モデルなどを紹介し、その定義を明示するとともに、心理臨床家の MCC 教育プログラムに必要な知識や概念を整理した。

第Ⅱ部では尺度作成を行った。Multicultural Counseling Inventory (MCI)を用い、バックトランスレーションを基に作成された日本語版に対して専門家から得られた回答により、探索的因子分析を用いて因子構造の確認を行った。その結果、3 因子（“気づき因子”、“技術因子”、“関係性因子”）が抽出された。なお、MCI の 1 因子である“知識”はその 7 項目が除外され、4 項目が他因子に吸収された。除外された“知識”7 項目に対し探索的に因子分析を行ったところ、1 因子 6 項目が抽出された。既述の 3 因子を日本語版 MCI とし、知識因子を日本語版 MCI 知識尺度とした。2 つの既存の尺度を用いて、日本語版 MCI との相関を検証したところ、中—高程度の相関が確認された。調査 2 として、日本語版 MCI の再検査信頼性を検証したところ、確認されなかったため、調査 3 で新たに再検査を行って検討したところ、再検査信頼性が確認された。

第Ⅲ部では、日本の心理臨床家を対象とした MCC 教育のためのワークショップ・プログラム（90 分×3 コマのプログラム）を作成し、その効果検証を実施した。プログラムの内容は、既存のプログラムを比較、分析したうえで、第Ⅰ部から得られた知見を包括した内容とした。実施や効果については、アンケート調査による評価と、日本語版 MCI を用いた評価を実施した。

効果検証では、心理臨床家と大学院生を対象とし、プログラム前後の MCC を、日本語版 MCI および日本語版 MCI 知識尺度を用いて測定した。対象群に対し MCC 教育プログラムを実施し、教育前後の MCI 得点を比較した。統制群にはプログラムを実施せず、質問紙にのみ回答を依頼した。評価は対象群のプログラム前後のプレーポストテストの結果、さらに 3 週間後のポストテストⅡの結果、統制群のプレーポストの結果やアンケート調査結果を統合的に分析した。

対象群の全体の平均を確認したところ、有意差が見られた。また、各テスト間の平均をそれぞれ確認したところ、プレーポストテストⅠ間と、プレーポストテストⅡ間に有

意差が認められた。これらのことから、本教育プログラムにはMCC向上を促進する効果があり、特に実施直後に顕著なMCC向上の効果があり、3週間という時間を経てもその効果が減少することはないと考えられた。MCI 因子（下位尺度）別の分析において、いずれのテスト間にも有意差を確認しなかったため、本プログラムを受講することで、心理臨床家の平均的なMCCの向上は期待できるものの、各因子の突出した変化は認められないと考察した。アンケート調査の結果から、内容は概ね高い評価を得ており、MCCの学びの機会のニーズがあることを考察した。

最後に、本研究で得られた結果を日本における多文化間カウンセリングにおけるこれまでの知見と比較して考察すると共に、本研究の問題点と今後の課題について論じている。

4. 論文の評価

（1）研究テーマの社会的意義

本研究は、多文化社会である日本において業務を行う心理臨床家にとって、その重要な職能であるMCC獲得の一助となり、多様化する社会の中で十分に機能する心理臨床家育成の一助となる知見を得ることであった。先行研究のレビューにより、日本の心理臨床領域においてはこのテーマに関する研究・実践共に乏しいことが指摘された。心理臨床家を対象として作成されたMCC測定尺度日本語版、および、本研究において開発されたMCC教育プログラムは、今後の日本における多文化間カウンセリング領域における臨床実践および臨床家の教育に有用となる可能性が示唆されている。

（2）得られた知見の有用性

本研究において作成された日本語版MCIは、基本的な尺度作成の手続きを踏襲していることから、MCI の邦訳版として一定の基準を満たしており、また既存尺度との相関から、基準関連妥当性は担保されたと考えられる。国内において比較対象となる尺度が乏しいことから、日本語版MCIの改訂、検討に必要な比較対象が少ないという問題が挙げられるものの、この尺度については今後有用性が増すと考えられる。また、北米における研究とは異なる因子構造が得られているが、この結果は本邦におけるMCCの現時点における構造を示していると考えられ、今後の新たな展開につながる可能性のある知見と言えよう。

（3）本研究の限界と今後の課題

本研究の第Ⅰ部において、広義の多文化と狭義の多文化の違いが論じられているが、本論文を通じて、広義を扱っているのか、狭義の多文化を対象としているのか、一貫性が見られず、混乱を生じていることが指摘される。また、北米における多文化間カウンセリングの現状と、日本における現状には大きな違いがあり、北米でのモデルをそのまま本邦において用いることの妥当性についても疑問が提起された。因子分析において、除外された知識項目をワークショップの効果測定に用いたことは異例であるとの指摘

があった。また、用いた統計手法の記載に誤りがあることも指摘された。

MCC 教育プログラムの作成および効果測定については、すべて筆者自身が行っており、内容自体への評価は客観性に乏しい。効果測定に関して行われた分析手法にも疑念が提起された。短時間で行われるプログラムであり、臨床家の基礎的教育としては内容に偏りが生じやすい危険がある。

Ⅱ　審査結果

2019 年 1 月 23 日に開催された博士学位申請論文予備審査会において、博士学位申請論文提出手続きを進めることが認められた。2019 年 11 月 26 日に申請者が提出した論文について、2020 年 1 月 29 日に専門審査委員会委員による論文審査、口述試験および質疑応答を行った。その結果、審査委員全員一致により、申請者の論文が博士の学位授与対象論文であると判定した。

2020 年 2 月 12 日に湯浅氏の博士学位申請論文について、心理学研究科委員会において審査を行った。その結果、申請者の博士学位申請論文に対して全員一致により博士論文を合格と判定した。